

奪われ、再び一人と
なった落第騎士

落第寸前の男の要望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒鉄一輝は家族に『居ない者』として扱われてきた。

しかし、そんな彼にも居場所ができたのだ。暖かい世界は彼に上部だけじゃない、本当の笑顔を与えた。大切なモノを造らせた。愛を教えた。

なら、その続きは？

世界は彼に、“得たからこそ”失う時の喪失感を、絶望を、焦燥を、教えたのだ。

時系列はアニメ最終話から、山形への強化合宿中を劇場版映画っぽく書いてみたいと

思います。

目次

第1話 『prologue』	1
第2話 『漆黒の短刀』	11

第1話 『prologue』

——《ノウブアルアーツ伐刀絶技》

それは己が魂を武器として具現化させた、魔導騎士……伐刀者ブレイザーによる異能の力。

この世に生を授かったその瞬間から決まる固有靈装デバイス、言わば才能の為せる技であり、その優劣は否応無く世界にヒエラルキーを築いた。

それがあれば大抵のモノは手に入ったし、人の心でさえもそのチカラで屈服させることが出来たからだ。

人々は優秀な伐刀者を求め、争い、怯え、そして讃えた。

国のパワーバランスさえ掌握したその異能のチカラを、我々は伐刀絶技と呼ぶのだ。

そしてその伐刀絶技の中でも異端中の異端——

《いんがかんしよけい因果干涉系》の伐刀絶技は、そのあまりにも特異でいて、事象を変化させるといふまるで世界の理を鼻で笑ったかのような能力から、伐刀絶技の中で最も強い。つまり“最強”と称されている。

しかしそれほどの異能、当然稀有けうでなければならぬ。

そして実際、それはその枠に収まった。だからきつと、そのチカラを持って生まれた人間は、皆等しく天才と言われるのだろう。

たとえばその他のパラメータを度外視したとしても、天災級の可能性すら秘めたその異能は絶大である。

そこで質問だ。

そんなチート地味な能力相手に、例えばどうだろう、ヒエラルキーのランクFが相対して、剣を交えたのなら？

まるで蚊でも払うかのように相手にされないだろうか？ それとも必滅の一撃で、もっ即座に地にねじ伏せられるだろうか？ はたまた自ら頭を下げ、許しを乞うだろうか？

その答えは、その結果は、どんな結末であろうとランクFに敗北の二文字を浮かび上げさせる。それは火を見るよりも明らかだ。

ーなどと、のたま宣うのは少しばかり早計である。

何故なら彼ならば

かつて落第騎士ワーストワンと嘲笑されながらも、自己の研鑽を止めることなく、全力の最強最強を以て数々の最強を打ち倒してきた彼ならばどうだろうか。

そう。彼、
黒鉄くろがねいつき一輝ならー

七星剣武祭にて《雷切らいぎり》 東堂刀華を破つて以来、破軍学園の興奮覚めぬまま、一輝は代表の中でもリーダーという立場に持ち上げられた。

破軍学園生徒、教員、その殆どが彼を認め賛辞を送ったのだ。

つい最近まで友人はおろか、家族にすら肯定されていなかった一輝にとって、それはとても有難いものであったし、励みになった。

だが肯定されるとは、選ばれるとは同時にそれらを背負うということだ。それは期待であったり、敗れた選手の夢であったり、大切な人との約束であったり……

「もつともつと、強くならないと」

剣尖が触れ合い、瞬時に柄を捻り上げ相手の一撃を逸らす。

素早く間合いを詰め、両手で柄を握り直し斬り下ろそうとした。その間僅かコンマ5秒の世界。

人間の反射速度は通常0.3秒。切り上げられた腕を考えても防御は間に合わない。しかし――

ギイインツ!!

「ははっ流石ステラだ。これぐらいは決め手どころか、小細工にもならないね」

「当然よイツキ。それより練習だからって手を抜かないでよね」

「勿論だよー」

一輝と撃ち合う彼女の名はステラ・ヴァーミリオン。

ヴァーミリオン皇国第二王女にして、《紅蓮の皇女》と呼ばれるランクAの魔導騎士である。

その火を操る類稀なる才と、血の滲むような努力により、彼女もまた破軍学園における七星剣武祭代表の座を勝ち取った。

まごう事なき天才が、また比類なき努力を重ねたのだ。そのポテンシャルの高さから、優に彼女は凄まじい速度で成長している。

一輝と恋仲であり、皇女でありながら決勝にて公然の場で愛を誓い合い、キスを交わした。それによってもはや交際を隠す必要性もなくなった今、彼女の心はとても晴れや

かである。

そんな彼等は現在、来たる七星剣武祭に向け霊装の使用許可を得て、鍛錬に励んでいるという訳だ。

「はあっ!!」

激しい撃ち合いの末に生じた一瞬の隙を突いて、ステラが小規模な火球の雨を降らせる。

その火球の軌道は直線的なものから歪曲されたものまで、実に不規則な動きをしていた。

(これは……雫珠しずくの《水牢弾すいろうだん》からイメージしたのか！)

直線的なモノは単なる自由落下、歪曲されたモノは魔力制御だろう。

肌を焼き焦がす礫ことごとの悉くを、或いは避け、或いは撃ち落とす。しかし火球の星屑は上から降ってきた。つまり一輝は今、人間の絶対的な死角である、上方を向かされている状態だ。

その間は、上以外の全てが視えない。

「もらった!!」

一輝の懐に飛び込んだステラが剣を横薙ぎに振るう。腰の捻りと遠心力を加えたその一刀は、神速の居合いにも近い程のスピードを有していた。

しかし、裂帛れつぱくの気合いで以て放った一撃は、敢え無く中断される。

「第一秘劍、《犀擊》!」

「……なっ!?!」

一輝が床のタイル目掛けて刃を突き立てると、瞬く間に亀裂が広がり、タイルが粉々になりながらめくれ上がった。

「……この床のタイルはいつも目にしてるからね、どこをどう突けば良いかは見なくても分かるんだ」

慣性に従ったまま身体を投げ出される羽目になったステラの視界を、一粒のタイルが塞いだかと思うと、一輝の霊装、《陰鉄》いんてつがその粒を刺突で破壊。ステラの目と鼻の先に、その刀身を晒したのだった。

「ステラも飲むかい?」

「んっ、ありがと」

稽古を終え、一輝から手渡されたスポーツドリンクを、簡単な返事で受け取るステラ。以前の様な間接キス……という訳ではなく、もう一本用意されたものだ。

付き合っているとはいえ、まだ互いに日が浅い。いや、勘違いしないで欲しいのだが、愛の深さに時間が関係しているという事ではなく、2人の恋に対する免疫がまだ弱いという意味である。つまり浅いのは彼等の色恋沙汰への経験というわけだ。

まあだからと言って、無意味に間接キスをする必要性は全くないのだが――

「お・兄・さ・ま！」

「やあ2人とも、見ててくれたんだね」

「はいっ！ お疲れ様です」

「ふふっ、格好良かったわよ」

実の妹であり、水を操り多彩な技を使う《ローレライ深海の魔女》の異名を持つ黒鉄雫くろがねしずくと、彼女のルームメイトであり、同じく代表に選ばれた影を操る有栖院ありすいん風なき。

両名とも一輝やステラにとって大切な仲間であり、行動を共にする事が多い。

更に二人とも戦闘能力が高く、一輝とステラは言わずもがなであることから、このグループ、生徒会に匹敵する程の知名度と強さを持っているのだ。

「ところでお兄様。私、喉が渴いてしまいました。少し、頂いても宜しいでしょうか？」

「ん？ あ、ああ。勿論いいよ」

不意に雫珠が喉の渇きを主張してきたので、自然と飲んでいたスポーツドリンクを手渡す。

それを可愛らしい笑顔で受け取った彼女が、まるで吸い付くようにキャップに口を――

「はい、喉が渇いてるんなら私のあげるわよ？ 単に水分を補給したいなら、別にイッキのじゃなくてもいいでしょ？」

「……………」

付ける前に、背後からステラにドリンクを交換される。

「いえ、ステラさんお口が臭いので。お兄様のドリンクを返して下さい」

――ピキツピキツ

ステラの形の良い眉が痙攣し、笑顔のまま固まる。

この瞬間、一輝は悟った。

目線でも栖に助けを請うにも、笑いながらお手上げのポーズを取られてしまう……

「あらー、それならしょうがないから新しい飲み物買ってきてあげるわよ？ お金も出すわ。何が良いのかしら？」

「そうですか、ではK_コo_ナ N_ニi_ガa_リをお願いします」

「は？ 何それ？」

「ハワイ沿岸600mの深さから採れる水です」

「それ絶対近くに売ってないわよねっ!？」

1ℓで\$120、つまり約6万5千円と世界でも高級な水のうちの一つである。純粋なミネラルが凝縮されており、水で薄めてからじゃないと体調不良を引き起こすから飲む時は気を付けてね。

「え、皇女様ともあろうお方が約束を違^{たが}えるんですか?」

「な、あんたこそ私が買いに行ってる間にイツキのドリンクを飲むつもりでしょ!!」

「はあ、胸に栄養が行き過ぎて思考までそんな風に汚染されてしまったんですね。ピクトリアフオールズにでも打たれて浄化されてきて下さい」

「どんだけ時間かかんのよ! とうかあんなのに打たれたら死ぬわっ! 本当の意味で浄化されるわっ!」

ははは……

いつもの騒動、いつもの風景、いつものメンツ。何気無いそんな毎日が、本当に愛おしかった。

今この時は間違いなく、今まで一輝が歩んできた人生の中で最も輝かしい時間だ。色も温度も無かったセカイを、華やかに飾って照らす陽光だ。

(これが僕の居場所なんだ。帰るべき場所なんだ)

そう思うと自然に笑みが溢れる。そのぐらゐの妄想はしたつて構わないだろう。しかしそんな毎日は、唐突に、無慈悲に、一切の隙を見せずして、別れを告げた。そう。他の誰でもない。黒鉄一輝によつて。

第2話『漆黒の短刀』

その日、黒鉄一輝は珍しく夜更かしをしていた。

いや、正しく言うなら眠れなかったのだ。

彼の身体は震えていた。

ただしそれは、寒さであったりとか、恐怖であったりとか、不安であったりとか、そんなマイナスイメージのものによつてではない。

彼の肉体は絶えずエンドルフィンを分泌していたのだ。そしてその根底にあるモノとは正しく、闘争本能であった。

生徒会長、東堂刀華から山形にある巨門学園の施設を借りた強化合宿の話が出たのだ。

自分のいまだ知らない世界、領域、新たな強敵、新たな技、新たな成長。今までまともな実践の授業すら受けられなかった一輝にとっては、武者震いをするなどという方が、興奮するなどという方が酷な話だろう。

「よし、決めた！」

眠気など微塵も感じない。

身体を動かしたい衝動に駆られる。

「こういう時は有酸素運動に限る」

一輝はステラを起こさないようにゆっくりと2段ベッドを下り、ウインドブレイカーを羽織つて外へ出た。

吐き出した息は白く染まり、吸い込んだ冷気は肺を内側から裂くように熱を奪う。

しかし、今の彼にとってその程度の事は些末なモノだった。

頭の中でイメージするのは未だ見ぬライバル達との剣戟であり、頂きに歩みを運ぶ己の姿のみ。ただその事への執念が、感慨が、熱情が、彼の五臓六腑に染み渡り、大地を蹴り進める。

気付けば一輝は優に朝のトレーニングの分、つまり20キロを完走させてしまっていた。

肩で息をしながら、街灯の明かりに目を細める。

時刻にして深夜3時頃といったところか。

「ふうー……」

大きく息を吐いて胸に手を置き、鼓動を確認する。心臓は未だ早鐘のように拍動していたが、心は落ち着きを取り戻していた。これならぐっすり眠れそうだ。

睡眠は量より質だと、とあるアスリートが言っていた。このままベッドにダイブした

ならば、極上の睡眠を得られるだろう。

(ーと、そういう訳にはいかないようだね)

静かに、緊張の糸が張り詰めた。

霊装の許可は降りていない、代わりとなる武器もない、人を呼ぼうにも携帯すら部屋に置いたままだ。

さらに頼みの綱である《一刀修羅》でさえも、今朝のステラとの鍛錬から24時間経過していない。つまり今使えるのは体術のみだ。

全身にビリビリと伝わってくる殺気に、一輝の頬を先程まで搔いていた汗とは別種のモノが流れる。

「そこに隠れているのは誰かな」

こちらは急に止まって辺りを見回したのだ。あちらは一輝が存在に気付いているなど、とつくに知っているだろう。

ならここは声を掛けるのが正解だ。いきなり出てこられるよりは、呼びかけて姿を晒させた方が都合が良い。

呼び掛けに対し、木陰から緩りと姿を現したのは、なんと一輝も良く知る人物だった。

「き、桐原君？」

「やあ黒鉄君、久し振りだねっ！」

下卑た笑みを浮かべながら登場したのはそう、去年無抵抗の一輝を一方的に蹴り、七星劍武祭でも代表として出場した桐原静矢その人だった。

しかし実力者であつた彼も、今年は公式の場で一輝に敗北、あまつさえ命乞いをするという痴態を晒したことは記憶に新しい。

どうやらそのせいでフアンの子達から見限られ、今はまだその事で意気消沈している――

「……んな時間まで特訓とは実に素晴らしい！ 落ちこぼれの君はそれぐらいやらないと、ね？」

善なのだがこの男、存外ピンピンしているようだ。

「……桐原君は特訓じゃないのかい？」

「はっ！ 馬鹿を言うなよ。僕は天才なんだぞ？ そういう泥臭いことは凡人がやれば良い」

「じゃあ、どうしてこんな所にいるのか聞いてもいいかな？」

「……ここでは平静を装っていた一輝だが、流石に我慢の限界だ。

答えようとする静矢を牽制するように、続けた。

「後、どうして今話をしてるその間も、こうして僕に殺気を向け続けているのかも、ね？」

「……………」

桐原静矢は不敵に笑んだ。

いつもヘラヘラして居る彼ではあるが、その顔はかつて一輝が見たことのない程に、醜悪なモノだった。

（彼という人間のことは一度《パーフェクトビジョン完全掌握》で見切った筈なのに……あの闘いの後桐原くんには何かあったのか？）

彼からは感じたことのない重圧、本気の殺意。

まるで桐原静矢であつて桐原静矢でないかのような、別人のような印象だ。

「黒鉄君、僕と取引しないかい？」

「……………取引？」

一輝がそう零した瞬間、静矢は地面を蹴った——

「僕が君の代わりに頑張つてあげるから、その代わりに君は消えちやいなよ!!」

「—————っ!」

殺気を放つてくれていたお陰で臨戦態勢の取れていた一輝は、細い体躯ながら凄まじいスピードで突進してきた静矢を、すんでのところで横飛びに躲す。

そのまま飛んだ方向と反対の足を軸にし、まるで回転扉のように180°回転して、静矢の背に蹴りを浴びせた。

勢いそのまま前のめりに倒れこむ彼の背を見送る一輝。だが、何かがおかしい。攻撃は確かに決まった。しかし、何故か解せない。

どうして彼は固有霊装、《朧月》を使わなかった？ 明らかにこれは闇討ち。使用許可云々の話ではないはずだ。

それに姿を見せずにそのステルス能力を使えば、いかに一輝といえど先制を受けるのは免れない。

いや待て、そもそも――

桐原静矢がインファイトを仕掛けてきた？

あり得ない……っ！

その思考に至った瞬間、一輝の右足に鋭い痛みが生じる。

「――ぐうっ！ 何だこれ、い、犬っ……？」

そう。一輝の右足に後ろから噛み付いていたのは、1匹の犬だった。

それも普通の犬ではない。こいつは『軍用犬』だ。

もしただの犬の類であるならば、思考に気を取られていたとはいえ、一輝が噛まれるなどあり得ない。

この犬は一輝の背後に、気配を消して近づいたのだ。

更にそれだけではない。一輝はその強烈な痛みに、一瞬意識を奪われかけてしまう。

「ははっどうだい、僕のジョンこと、Rotttweilerロットワイラーの甘噛みのお味は？」
「ーっ！ ロットワイラーだっつて!？」

ーロツトワイラー。

……突然だが人間の武器とは拳や足、剣や銃、戦闘機や戦車まで、なんでもある。
なら犬の……軍用犬の攻撃手段とは何か？

勿論それはその強靱な顎と鋭利な歯である。

たかが犬に噛み付かれたぐらいで。と甘く見ない方がいい。

優れた視覚、嗅覚による探索能力は勿論のこと、その直接的な攻撃力は第一次、第二次大戦などの戦争で重宝されていたのだ。

さらにことロツトワイラーにおいて、その咬合力くわうりょくは1180〜1460ニュートン。
つまり約120〜140キロにまで達する。

(くそっ！ どこが甘噛みなんだ。もう右足の感覚がない)

桐原静矢の狙いは最初からこちらだったのだ。無謀なインファイトはただのブラフ。
それを突発的に全力で行うことで、うまく一輝の注意を引いた。

噛まれたところから血が流れ出し、足元に軽く血溜まりが出来上がってしまう。

ジョンと呼ばれた犬を引き剥がそうとするが、噛む力が強すぎて剥がせない。霊装を使えば退学の引き金にされる。一刀修羅も使えない。

対して静矢は埃を払いながら悠々と立ち上がり、こちらへと近付いてくる。

「黒鉄君。僕がジョンに命令をすれば、分かるね？」

「……そうだね。右足は諦めた方が良いかもしれない」

実際、ジョンは一輝の足を噛んだ後は、微動だにしていなかった。しかしこれは、かなり効率が悪い。

《死の回転デス・ロール》というのを聞いた事はあるだろうか？

それは噛み付く力があっても、噛み砕く能力の無いワニが、敵の肉を引き千切る為に獲物に噛み付いた後、回転するという習性の事だ。

つまり何が言いたいかというと、噛み付く力が強く、咀嚼能力も高い哺乳類であるジョンがその気になれば、一輝の右足は簡単に噛み千切られるということだ。

激痛と出血で意識が飛びかける中、一輝は考えた。

ここでやられるぐらいなら、右足はくれてやる。彼が油断して限界まで近付いてきた、その時が勝負だと。

一步、また一步と静矢が近付いてくる。

(……)だっ!!)

「おっと、それは出来ないんだぜ黒鉄くんっ♪」

「……………へ？」

——驚いた。

急に身体が軽くなったことに？

決死の特攻が不発に終わったことに？

視界から桐原静矢が消えたことに？

——否。

腹部に見たことのない漆黒の短刀が突き刺さっていることに、だ。

いや、もつと正確に言えば。

その短刀が固有霊装であることこそ、問題があった。

知つての通り、桐原静矢の固有霊装は《朧月》。その形状は弓であり、決してこのよ

うな短刀ではない。

隠していた？ いや、そもそも霊装を二つも持っているなんて、聞いたことがない。

「ホー・ルイン・ワンツッ！ ワーストワンが、ホー・ルイン・ワンツッ！ いやーナイス
ショットですよ御料人ツ☆」

一輝は腹部から流れる鮮血に顔を歪めながら必死に思考を巡らせる。

（考える、何があつた？ 桐原君が近付いてきたその瞬間、飛び出そうとした僕の足を

ジョンが急に離れた。身体が軽くなった理由はこれだ。そして体勢を崩されたまま僕が桐原君に被さるように投げ出され、カウンター気味にこの妙な短刀に腹を刺された。つまり一輝がこの瞬間を狙っていた事も、右足を犠牲にする事も読まれていたという事だ。

しかし、分かったのはその動きのみ。

肝心の短刀に関しては、彼が霊装として呼び出したように見えた事以外は何も分からない。

「一体、これ……は？」

「うーん、黒鉄君。それについてはこれから君が嫌でも知ることになると思うよ？」

そう静矢は零し、一輝に刺さった短刀の柄を両手で握りしめる。

瞬間、静矢の魔力が高まり、まるで生き物のように唸りながら、そんなイメージで短刀へと注ぎ込まれていった。

「正直早く辞めたかったんだよね。なにせこの男の情け無さ、反吐が出る」

「な……にを？」

一輝の言葉に静矢は笑みだけで返して、

「奪い取れ、《強者のみが存在する》」

抜刀絶技と思しきものを発動。

刺された傷口からその漆黒の短刀へと、一輝の中から大量の魔力と、そしてナニカが奪われていく……

黒鉄一輝はこの瞬間、黒鉄一輝ではなくなつた。